新・下野市風土記 33

文化財（城）は地域のシンボル

下野市教育委員会　生涯学習文化課

広報の締め切りが近づいている今、熊本で大きな被害を出した震災がありました。被災地の方々には、お見舞い申し上げます。文化財の業務を担当している筆者には、熊本城の石垣が崩れ、大天守の瓦や鯱が落下した映像を目にした時は、心が潰れる思いでした。「まさか、最近まで文化庁の補助事業で修理していた、あの熊本城が崩れ落ちるとは」との思いに駆られました。「武者返し」と呼ばれる反り返った石垣を採用した加藤清正と「高石垣」と呼ばれる伊賀上野城は三〇メートルもの高い石垣を採用した藤堂高虎。両者は日本の歴史上数少ない築城の名手で、その清正に縄張りされた壮大な熊本城は、まさに難攻不落の名城でした。

藤堂高虎は、江戸城、二条城、宇和島城（愛媛県）などのほか、天和三年（一六一七）日光東照宮の造営奉行も務めました。さらに京都南禅寺の山門などの建築も手がけました。

熊本城の大天守は、明治十年（一八七七）に西南戦争で焼け落ちましたが、昭和八年（一九三三）に敷地は史跡に、建造物は国宝・重要文化財に指定されました。

加藤清正は地震と関係のある歴史上の人物で、歌舞伎「桃山譚」や落語の「地震加藤」は清正のことです。文禄五年（一五九六）九月五日に発生した慶長伏見地震の時、石田三成の讒言で秀吉の怒りを買い謹慎中の清正が、一番に被災した指月伏見城に駆けつけ、動けない秀吉を負ぶって脱出し謹慎が解かれた話です。実際には清正は当時、大阪の屋敷にいたことが残された書状から指摘されており、この話は創作であるといわれています。ただ、被災直後に秀吉の家来や大阪の商人、京都の寺社が窮民の救済のために炊き出しを行い、仮設住宅などを提供したともいわれています。

この指月伏見城は、昨年6月に京都府の発掘調査でその存在が確認されました。築城後約二年で地震に見舞われ倒壊し、廃城となり埋められたため、幻の城といわれていました。さらにこの時、今城塚古墳（大阪府高槻市）は地崩れを起こしたことが発掘調査でわかっています。大阪府羽曳野市の誉田御廟山古墳（応神天皇陵）も墳丘の一部が崩れており、七三四年か一五一〇年の内陸型地震の被害と考えられています。

このように発掘調査で記録に残されていない台地の記憶を確認することが可能となりつつあります。古記録はどうしても政治・経済の中心地であった関西地方中心のものとなりますが、発掘調査で記録に無い災害の記録を確認することができます。栃木県は、近世日光の二社一寺の完成以降記録が増えますが、それ以前は公卿などの日記のような日々の記録は残されていません。県内の歴史資料により被害の知られている地震は、天和三年（一六八三）の日光地震があります。この一連の群発地震で、五十里村で生じた山崩れが川を塞ぎ五十里湖ができたと記録されています。県南部では、古記録に残る地震の被害ははっきりとわかりません。ただし、古くは弘仁九年（八一八）の東国の地震の記録があります。「相模・武蔵・下総・常陸・上野・下野国、震動る。」『類聚国史』の記録があります。埼玉県北部では、この時の被害が発掘調査で確認されています。栃木県内では災害痕跡は確認されていません。ただ、埼玉県で被害後にその地域は、いち早く復興が行われたことが竪穴住居跡の増加などで確認されています。昔から日本人は何度も天災に負けず立ち上がっています。熊本の皆さんも一日も早く元の生活に戻れるようにご祈念いたします。

参考文献

二〇一三『古代の災害復興と考古学』高志書院